

I サムエル 14 章 24～52 節「兵を苦しめた命令」

キリスト者としてこうあるべきという思いや行いになっていることがあるかもしれません。人に良く見られるようにということが動機になっているかもしれません。サウルの態度から私たち自身のことを振り返られます。

ヨナタンの主に信頼する態度と行動を主が用いて、敵の陣営全体に恐れと混乱が起きました。主がイスラエルを救われました。主が救いのみわざを行われるのに人数は関係ないというヨナタンの信仰の通りになりました。ペリシテ人は西の方へ逃げて行き、イスラエル人は追って行きました。この戦いはまだ続きます。その中でサウルの問題が明らかになります。

1. 誓いのもとで苦しむ（：24～30）

24 節。信仰のしるしとなる断食をすれば、神が勝利を与えてくださるとサウルは考えたのでしょうか。「食物を食べる者はろわれよ」と言って、戦いに出る前に兵たちに誓わせていました。その結果、兵たちは疲れ、空腹になり、ひどく苦しんでいました。彼らは「誓いを恐れてい」ました。神、主に対して誓ったことは守らなければならない、守らなければろわれるという恐れが人々にあったことが分かります。

ところが、ヨナタンは先に敵陣に斬り込んで行ったので、その後に出陣したサウルと兵たちが誓ったこのことを聞いていませんでした。彼は杖の先を伸ばして蜜蜂の巣に浸し、蜜を口にしました。「すると彼の目が輝いた」とあります。

ヨナタンが蜜を口にした様子を見た一人の兵士が誓いのことを話しました。そして、自分たちの苦しみを伝えました。このことを聞いたヨナタンは言いました。29～30 節。誓いを立てるのは信仰的ではあるけれども、この誓いは実際的ではありません。サウルは信仰者として行動しようとしているのですが、一貫していなかったり、現実には即していなかったりしました。それに対してヨナタンは、実際の状況の中でふさわしく信仰を働かせていました。

神を恐れ、信頼すると同じように言っても、決まった型通りにしなければならないという行動となるか、それとも実際の状況にふさわしく対応しながら、主への確固とした信頼に立っているかの違いがあります。

2. 兵たちの罪（：31～35）

サウルが兵たちに誓わせていたのは「夕方」までという期限付きのことです。それで日が暮れて、その日が終わると、誓いから解放された兵たちは分捕り物に飛びかかりました。空腹を我慢してきて、疲れきっていた兵たちは判断力を失って、むしゃぶりつきました。

「兵たちが血のままで食べて、主に罪を犯しています」とサウルに報告する者がいました。血がついたままの肉を食べることは律法で禁じられていることです（レビ 17：11～12）。祭壇でいけにえの動物を献げ、血を振りかけたのは、いのちによって贖われ、罪を赦されるからでした。血はいのちそのものであり、神に献げるのであって、それを食べることは禁止されていました。

兵たちの行っていることを聞いたサウルは、大きな石を祭壇として、そこに家畜を連れて来て、屠って血を流して主に献げ、そうしてから食べるようにと兵たちに命じます。表面上は律法に従っているように見えます。けれども、サウルは兵たちがそのような状態になったのは、自分が軽率に誓わせたことが原因であることを認めていません。そして、「おまえたちは裏切った」と一方的に断罪しています。

このように群れのリーダーが自分自身の責任に目を向けずに、属する者たちに責任を押し付けるようであれば、その群れはどうなるのでしょうか。愛によって結び合わせられるのではなく、恐れによってかろうじて留まっているようになるでしょう。主の御前に自らの罪、過ちを認め、悔い改めて、キリストの血によって赦されていることを感謝している者であるようにと示されます。

3. サウルの愚かさ（：36～46）

イスラエルの兵たちは疲れきっていたけれども、勝利の喜びに満たされながら、分捕り物の家畜を屠って食べ、休むことができました。ところが、サウルは言います。「夜、ペリシテ人を追って下り、明け方までに彼らからかすめ奪い、一人も残しておかないようにしましょう」。確かにそのようなチャンスです。でも、兵たちの状態を考えたら、良い判断と言えるでしょうか。

そこで祭司が進言しました。「ここで、われわれは神の前に出ましょう」。戦いに出る前は、神のみこころを求めさせ、でも途中で止めさせて、戦いに出て行ったサウルでしたが、ここでは、祭司の進言に従います。そして、神に伺います。

しかし、神は彼にお答えになりませんでした。どうして答えがないのだろうとサウルは考えました。私たちにも神のみこころを求めても、答えが示されないように感じる場合があります。そのような中で、私たちがどのように考え、行動するかを主はご覧になっているでしょう。

サウルは神の答えがない理由を考えて、罪があるからだと考えます。そして、民の代表者たちを集めて、神の答えがないのは誰かの罪があるからだと決めつけ、その罪を犯した者は死ななければならないと言います。「たとえ、それが私の息子ヨナタンであっても、必ず死ななければならない」と、一見信仰的で勇敢に思えるような宣言をします。

そして、サウルは犯人探しを始めます。おそらく祭司のウリムとトンミムによって答えを求めたのでしょう。「みこころをお示してください」とのことばは、欄外に書かれているように、直訳すると「タミム（すなわち、トンミム）をください」となります。それによって神の答えが与えられたのです。

民の代表者たちかサウルとヨナタンかの二つに分けると、サウルとヨナタンが取り分けられ、さらに二人のうちからヨナタンが取り分けられました。

ヨナタンは自分が蜜を口にすることを正直に話します。彼は誓いのことを知らなかったのですが言い訳をしません。「この私が死ななければなりません」と言います。ただ、自分の罪を認めているけれども、自分が蜜を食べたことが神の答えがないことの原因であるとは考えられないという思いだったのではないのでしょうか。

一方、サウルは自分が言ったこと、「それが私の息子ヨナタンであっても、必ず死ななければならない」とのことばを取り消すことができません。44 節。厳しいことばを語り、王としての対面を保とうとします。

この箇所に記載されているサウルの軽率な二つの誓いによって、イスラエルの兵たちは苦しみましたし、ヨナタンは殺されそうになります。

これまで民はサウルの考えに対して「あなたが良いと思うようにしてください」と答えていました。しかし、ヨナタンが死ななければならないということに対しては反対します。45 節。サウルの軽率な誓いよりも、ヨナタンの勝利において、主が働いておられたことは明らかだと民は考えています。こうして、民がヨナタンを救いました。そして、サウルはペリシテ人を追うのをやめて引き上げました。

神からの答えがない中でサウルがとった行動を神はご覧になっていたはずですが、そして、サウルの愚かな面は民にも明らかになりました。この箇所から思われるのは、自分の体面を保ち、自分を良く見せようとするのではなく、自分の過ちを示されたら、それを認めて、正しいことをする者でありたいということです。

4. サウルに関するまとめ（：47～52）

このようにサウルには愚かな面がありましたが、その後も周囲の民族との戦いがあり、サウルは勝利を続けていったということです。主によって立てられた王として、軍事面では用いられていきました。

その後にサウルの家族のことも書かれています。ヨナタンのことをサウルは自分の後継者として考えていたようです。しかし、主は「サウルの王国は立たない」とすでに宣言しておられます。

そして、サウルは一生の間、ペリシテ人との戦いに悩まされることとなります。そして、敵との戦いのために勇士たちを召しかかえていきました。

そうしてサウルはイスラエルの王であり続けます。しかし、主の前には、彼の王国は立たず、彼は退けられることとなります。その決定的な出来事が次の章に記載されています。

キリスト者として型通りに行動すればよいと考えるのではなく、主への確固とした信頼に立ちながら、実際の状況に対応していけるようにと教えられます。御霊の助けを祈り求めましょう。

それぞれに罪深さ、愚かさはあっても、主の御前に自らの罪を認め、悔い改めて、キリストの血によって赦されていることを感謝している者でありたいと願います。

神の答えが示されないと思うような中でも、主は常にご覧になっていることを覚えていましょう。人の前に自分を良く見せようとするのではなく、神の恵みによる救いが与えられていることを感謝するお互いでありましょう。